

---

# 魔法先生ネギま！畏を継ぎし死神

アーク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！畏を継ぎし死神

### 【Zコード】

Z0699W

### 【作者名】

アーヴ

### 【あらすじ】

主人公の黒崎一護は魔帆良学園の中等部に通うJく普通の男だ少しウザい父と家族思いの妹達、そして幼なじみの明石祐奈に振り回されながらも毎日を過ごしていた。  
だが、ある日を境に魔帆良の裏の世界に足を踏み入れてしまう。一護は守ると誓った人達を守る為に自分の秘められた力を使い、戦いの中に身を投じていく…

駄文ですが暖かい目で見守っていただけたら幸いです！

## 主人公設定（ネタバレ含む）

### 黒崎一護

「赤き翼」の一員だつた父、黒崎一心の子供。  
先祖代々、妖怪の血を引いており一護も例外では無く四分の一が妖怪の血である。

一護自身はそれを知らない。

また、一護は物凄い魔力を有しているが魔法は殆ど使えない。

### 容姿

BLEACHの黒崎一護と基本的には同じ  
妖怪化した際には髪の色が白と黒に変化する。

### 家族

黒崎一心（父）  
黒崎一護（息子）  
黒崎夏梨（娘）  
黒崎遊子（娘）

母親は海外に行つた時に乗つた飛行機で事故にあり、死亡した。

主人公設定（ネタバレ含む）（後書き）

感想お待ちしています！

## 一話（前書き）

香夜様、感想ありがとうございます！  
期待を裏切らないように頑張るので、これからも宜しくお願い致します！

「ふあ～よく寝たな・・・」

今日は俺達が通っている魔帆良学園中等部の始業式だ。

「お兄ちゃん～～」飯出来たよ～「おー遊子が呼んでるな・・・

「わかった！今行くぜ！」

リビングまで降り、扉を開けると・・・

「はつはつはつは～～お早う一護～！そして喰らえつ必死で「うつせえ」ゲポアアツ～！」

朝つぱらからうつせえなこの親父・・・

思わず蹴り、顔面に入れちまつたじやねえか。

「一兄、危ないじやん！こっち飛んで来たよ～」「ああ悪い夏梨、でも避けたから良いじやねえか」

まあ、壁にめり込んだ親父を心配せずに飯を食つてる娘つてのもあれだけどな・・・

「お兄ちゃん？早く食べないと祐奈さん来ちゃうよ～？」

そうだった・・・さつさと食べねえとな。

そう思いながら、朝食をかきこんだ。

「パンポン～」「は～い？あ、祐奈さん～ちょっと待つててくださいね？」

祐奈の奴、今日来るの早くないか？

まあ、いいか！

「それじゃあ行つて来るぜ～！」「行つてらっしゃい、一兄」「はつはつは～油断大敵だ～」「うつせえつ～！」

俺と夏梨のダブルパンチが背後から俺に襲いかかろうとした親父の顔面を捉える。

「さすがは我が息子だ・・・これなら療暮らしも大丈夫そうだ...ガハツ」

馬鹿が果てたみたいたが、どうでもいいか...

しかし、やう言えば俺つて今日から療で暮らすんだっけ？すっかり忘れてたな

「バカは無視して・・改めて行つて来る」「うん、行つてひつしやい」「そう言つ夏梨の顔もどことなく寂しそうだ。

「土日はこっちに帰つて来るから、そんな寂しそうな顔すんなよ、な？」と夏梨の頭に手を置いてやる。

「それもあるけど、一兄が居ないとあの馬鹿をビリしたらいいのかなつて思つたら…」

あ～…そっか…

「ウザくなつたら殴つて構わん、親だろ？が容赦はしなくていいからな？」

「分かつた！！」

よし、これで心配は要らねえだろ…

「行つてきま～す」「行つてらっしゃい」「妹達の声を背中で聞きながらドアを開けると…

「朝から楽しそうだにゃーーー護の家は～」

「こつちは良い迷惑だつての」

こいつは明石祐奈、家が近くで子供の頃から遊んでいた、まあ所謂幼なじみつて奴だ。

親どうしも仲が良いみたいで、家の馬鹿親父と祐奈の親父さんでよく飲みに行つている。

そして…お袋も同じだ…祐奈のお袋も、あの事件で死んでしまつた。…変な事思い出しちまつたな。

「どうしたの？」「いや…何でも無い」

過ぎた事を今更言つても仕方ないからな。

「ふ～ん…なら良いや～ほり、早く行こひよー護ー」「わかつてゐから、引っ張るんじやねえよ…」

笑顔で俺の手を引っ張つてくる祐奈…

俺はあの時に誓つたんだ…こいつのこの笑顔を守るつて…

きつとお袋達も、そう願つてゐるはずだ…

だから、俺は守る……」こつをもつて一度と泣かせなこみつこするため  
に…

それが、俺に出来る唯一の事だから…

「何してんの～？置いて行ひやがりうよ～」

「ああ、悪い！今行く！」

一話（後書き）

感想お待ちしています！

## 一話（前書き）

A S様、感想ありがとうございます！

「そういえば……一護って部活入るの？」

「部活か……考えてなかつたな。」

「まあ、色々見てから決めることにするぜ」

「ふうん、それなら一護バスケ部入れば？」「でも、中等部のバスケ部つて弱いんじゃなかつたか？」

「え！？」

「何、私今知りましたみたいな顔してんだ？」「こいつ……」

「知らなかつた……」「やつぱりか……」

「こいつ何かと抜けてる所あるからな、悪く言つなら馬鹿つてどこか？」

「馬鹿じやないよ！それに、言われるなら天然が良い！！」

「心を読むんじやねえよ、それに天然も馬鹿も変わらねえだろ……」

「甘いね一護！！天然はステータスなんだよ！！」

「はいはい」

と、祐奈の発言を軽く流しているうちに男子中等部の校舎が見えて来る。

「そんじや、俺はこっちだから」「うん、バイバイ……こっちにも遊びに来てね～」

「いや……それは無理だろ」

男子の俺が女子の寮に行つたら、色々と不味いからな……

そして、祐奈と別れた俺は校舎に向かつて歩き出した。

学校についてクラスに入ると「お早うーー ウィース」グハウツ  
！？」

まず、最初に俺めがけて飛びかかってきたアホをラリアットで瞬殺してから、クラスを見渡していた俺の頭に「よううーー護ー」とい

う声と共に衝撃が走る。

この声は…こいつも同じクラスかよ…！

「痛つてえな！何しやがる恋次！」「んだよ？ そう怒んじゃねえよ

一護「

こいつは阿散井恋次、見た目は不良みたいだが付き合つてみるとなかなか良い奴だ。

「そういうば、一護お前今日女連れて学校来てたな？」

「こいつ…要らん事を！！」

今の言葉に反応した奴らからの、殺氣が籠もつた視線が痛い程俺に刺さる。

なんかこれから大変そうだな…俺…

それから色々あつたが、今俺は始業式で学園長の話を聞いている。  
しかし…「長え…」

話に三十分かけるとか有り得ないだろ！

「頭がか？」どうやら恋次に俺の呟きが聞こえていたらしい。

「それもあるが、俺が言つてるのは話の方だ」

まあ、確かに頭長いけどな…ぬらりひょんかつての…

「それでは、これで始業式を終了する…」

やつとかよ…しかし、長かつたな

「なあ、一護？」「なんだ？」「お前この後どうするよ？」

どうするって言わてもな…やる事と言えば、とりあえず…「部活見学に行くかもしんねえ」「そつか、んじゃあ気が向いたらサッカ

一部に来いよ！」

そう、こいつはサッカーが滅茶苦茶上手い。

だから、中学入ったらサッカー部に入ると決めていたらしい…

「ああ、分かった」

そして、学校が終わつた後俺は部活を見て回る事にした。

結果…「決まらねえ…！」

見るのに夢中になりすぎて、全部を見る事が出来なかつた……orz  
しかし、どうしようか…

考えながら寮に向かつて歩く、俺に…

「キヤーッー！」

と、どこか聞き覚えのある声で悲鳴が聞こえた。

この声…祐奈かつ！？

そして、俺は悲鳴が聞こえた方に向かつて走りだした。

この時、俺は知らなかつた…

この夜の出来事で俺の運命が大きく変わることを…

一話（後書き）

感想お待ちしています！！

## 二話（前書き）

獅子丸様、ゆや様、感想有難う御座いました！  
後、この後アンケートがあるのでご協力お願いします！

(s.i.d.e祐奈)

「あ～疲れたあ！」

やつぱり部活はバスケにしようかな？

一護は弱いって言つてたけど・・・私が頑張つて強くすれば良いんだもんね！

でも・・・「もう夜かあ～」

こういう夜の日つて何か出たりするのかなあ？

「ガサツ」「えつ・・・・？」

う、嘘・・・でしょ？「お、鬼！？」

そう、今私の前に出てきたのは子供の頃に読んだ事のある絵本とかに描いてある鬼その物だった・・・

「なんや？姉ちゃん？ワシが見えるんか？」

に、逃げなきや・・・！

でも、体が動いてくれないっ！足も震えてる・・・

「堪忍してや？嬢ちゃん・・・見られたら殺さなきやいかんのや」

私の目の前に立った鬼がゆっくりと手に持った包丁みたいのを振り上げた・・・

「キヤーツ！！」

助けて・・・一護！！

そう願つても来てくれるわけないか・・・と私はゆっくり目を閉じた・・・

私、死んじゃうのか・・・お父さん、ごめんね・・・

一護・・・私、一護に言おうと思つてた事言えなかつた・・・

でも、私を襲う筈の痛みは全然来る気配がない・・・どうしたんだろ？

そして、目を開けた私の前には、望んでいた人がこっちを向いて笑っていた。

でも・・・「つたく・・・まあ、無事で良かつたぜ・・・」その人は私をかばって鬼に斬られていた…

( side out )

( side - 護 )

助けたはいいが…俺が斬られちゃ世話無えか…  
あ～ヤバい…かなり血出でんな…意識飛びそつだ…

俺は立てなくなり、地面に倒れる。

「い、一護つつ!!」倒れた俺に祐奈が駆け寄つて来る。

「ごめんね…私の…私のせいで」と言つ祐奈の目から涙が落ちる。

…何やつてんだ俺はつつ…!!

あの時…こいつを泣かせないつて…そう誓つたじゃねえか…!  
たとえ俺が果てようが、こいつを…こいつを…つ…守らなきゃいけ  
ねえんだっ!!

震える足に力を入れ、ゆっくりと立ち上がった俺の体が不意に熱くなる。

まるで…俺の中の血が熱くたぎつているみたいだ。

「な、なんや兄ちゃん!? あんた何者や…!!」

鬼がこっちを見て驚いている。

理由は知らんが…「祐奈…怖かつたら目え瞑つてな?」

これからやる事をこいつに見せる訳にはいかねえ…

祐奈が目を瞑つたのを確認して、鬼の方に向き直る。

不思議だ…力が湧いてくる…これなら…

「覚悟しろよ、テメエ…!」「なんや知らんが、やらな殺られるつて訳やな!」

覚悟を決めた鬼は俺に包丁を振り下ろしてくる。

だが、遅い…まるでスローモーションを見ているみたいだ。

難なく攻撃をかわした俺はカウンターで拳を鬼の顔面に叩き込む。

「ぐあつ…なんや兄ちゃん強いやないか…まるで百鬼の長、ぬらりひょんやで…」「人を妖怪扱いしてんじゃねえよ」

「何言つとんのや? そんないきなり髪伸ばしておいて何が妖怪じゅ

「はー? 髪が伸びて いるだとー! ?

「ほれ、見てみい」鬼がどこからか出してきた鏡を見ると…

髪が伸びた上に、色も橙から白と黒に変わっている。  
ってか、こいつ鏡ひとつから出したんだ？

「アーリーは氣にしたら負けやで呪ひやん?」 「心を読むんじやねえ!! サトウだらお前本當はつー?」 「鬼やで? 正真正銘のな?」 なんか… 戰う気無くなつてきただぜ…

しかし……」いつそんなに悪い奴に見

「ちやん、悪い奴は見えねえな……あいつらがな……と考えている俺に鬼が声を掛けてきた。

言葉を止める...

何故なら、鬼の体が徐々に消え始めていたからだ。

お前……」悪がいたのう兄ちゃん」「ジモコないな事したくないんや……せやけど命令されたら従わないかんねん……」「こいつ……本当は優しいんじやねえか……」

そして、俺は自然に鬼に右手を差し出していた。

ほんまに面白いなあ兄ちゃん！」  
笑しながら鬼が俺の手を握る。つとめる。

が、それはどこからか飛んできた一発の銃弾が鬼の頭を貫通する事で阻まばれた。

「は…?」一瞬何が起きたのか分からなかつた。

目の前は居た筈の鬼が消えたという事を理解した俺は徐々に怒りが込み上げてくる。

「誰だ……今、銃撃ちやがったのはあああああつつつつ……！」

## 二話（後書き）

アンケートの内容ですが、一護を女子のクラスに入れるか、それともそのまま男子のクラスで過ごすか？というものです。女子のクラスに入れたい！という人は、1をそのまま男子のクラスで！という人は、2と書いて下さい！

宜しくお願い致します！

期限は、今日から4日後でお願いします！

後、感想お待ちしております！

四話（前書き）

アンケート途中経過！

1、六票  
2、一票

となっています！

A S様、香夜様、ゆや様、reina様、煌焰様、寒月牙斬様、  
獅子丸様、ご協力ありがとうございました！

他の皆さんもアンケートもあと少しで締め切りなので、ご協力下さい

「誰だ、今銃撃ちやがつたのはあああああつつつつ！……！」  
俺の怒声と共に体から抑えきれない殺気が放たれる。

やりやがつた奴等は隠れてゐつもりりじいが・・・

「バーンだよーーー！」この声が止まらなかった。

の仕事は、何よりも重要な事である。

だから、林の影に隠れている奴等が普通に見えている。  
そして、隠れていた二人組が出て来て一手二脚で、走り出しき。

一人は俺に、もう一人は・・・

なるほど、まずは祐奈を安全な場所に逃かそうとしてか？

「お嬢が舞の囃子で歌二三首はいかが

と、俺の前に立っている野太刀を持つたサイドポーラーの女に声を掛けた。

「何が目的だ？」「目的……だと？　んなもん無えよ」

お、お嬢様？・・・誰？

何かこいこは思遣いしてんた 総丈

げつ！？問答無用かよつ！？

慌てて避けると、さっきまで俺のいた場所が吹き飛んでいた。

おいテスカー！危ねえが至かー！」 黒れ姫性

女に手を上げるのは気が引けるが……しょうがねえか

ますは…「その剣を渡して貰おうか?」「なに?ー?」俺の言葉に

女が重機している隙を窺って銃を奪う間に猶大ヒーラー捕獲される

俺とこいつ……どっちが早いかっ……！

そして俺と女の剣がぶつかり合つ直前に、どこからか誰かが割り込んで来た…

そいつは俺も良く知つてゐる顔だつた…

俺の拳を片手で受け止め、女の斬撃を刀で受け止めているそいつは…「れ、恋次！？」俺の親友の阿散井恋次だつた…

「誰だ！？お前はっ！」「あん？ テメ何こそ誰だよ？」と、恋次は怒鳴つてゐる女を面倒そうに見ている。

「邪魔をするならば容赦はしない！！」「そつかい、そんなに死にてえなら別に止めねえが？」その声と共に恋次の体から凄まじい量の殺氣が溢れだす。

す、すげえ…さつきの俺より迫力あるぜ…

「貴様…妖怪をかばうとはっ！！」「はあ？ めえが言えた事かよ混じり物が」「つ！！」

恋次の挑発で、明らかに女が怒り始めた。

「貴様ああっつつ！！！」激怒した女が恋次目掛けて切りかかって来る。

「一応忠告しておくがな…頭に血が上つてると相手の実力をばかり間違えるぜ？」

そして、恋次が俺の目の前から消えたと同時に女が吹き飛ばされる。

「つ、強え…」唖然としている俺の前に恋次が戻つて来る。

「なに、ボーッとしてんだよ！ 行くぞ一護！」「ど、どこにだよ…」

「俺達の部屋に決まつてんだろうが！ それに…お前に客も来てるしな…」

四話（後書き）

感想お待ちしています！！

## 五話（前書き）

A S様、感想ありがとうございます！  
連投なので出来が心配ですが…

客つて……一体誰だ？

恋次に連れられ、部屋のドアを開けると、そこには予想もしていなかつた奴がいた……

それは……「お、親父っ！？」

「よう、一護」と二つちを見て手を上げて笑っている親父だった。「連れて来ました、一心さん」「ああ、じき苦労だったな恋次」あれ？この二人って知り合いでだったか？

「つてか、一人で話進めるんじゃねえよ！」「わかつて、そう焦るな一護……」

……こいつ本当に親父か？いつもとまるで雰囲気が違え……

「それじゃあ話すが、まず一護……魔法を信じるか？」

…………あ、そういう事か！

「悪い！！親父っ！！俺が殴つたり蹴つたりしたから、ついに頭がおかしくなつてねえっ！！」「ぐはあつ！？」

親父のパンチを顔面に喰らい俺は壁に叩きつけられる。

「つたく……もう面倒だから魔法があると仮定して話をするぞ？」

「お、おう……」「まずは、もう気づいたどうがお前は妖怪だやつばそなのか……

「そして、俺もだ」「親父もか！？」「ああ、ただし俺は一分のが妖怪の血でお前は四分の一が妖怪の血だ」

それつて……夏梨達にも！？

「夏梨達は心配無い……血が薄まつていて影響は無い」

「そう……か」良かった……！

「さて、ここからが魔法の話だ……」

それからの話は俺を驚かせるばかりだった……

「……簡単に言つと、じきいう事か？親父は魔法世界で大戦を終わらせた紅き翼の一員で、しかもぬらりひょんでかなり強かつたと？」

「まあ、そんなところか」

親父が…英雄で妖怪ねえ…なんか複雑だな。

「それでだ、一護」「なんだよ?」「お前はどうしたい?」「どうしたいか?」

俺は…もう一度とあいつを泣かせる訳にはいかねえんだ!!!  
だから…「俺は強くなりてえ…守りたい奴を守れるようになら…」「  
そうか、なら鍛えてやる…付いてこい」

親父に言われ、ついて来た場所は…

「ログハウス?」「俺の側で恋次が震えているのが気になるな…

「どうした?恋次?何震えてんだよ?」

「直ぐに分かるぜ…」

どういう意味だ?と聞く前に親父がドアをノックする。  
そして、出てきたのは…

「どうぞ黒崎様、マスターが奥でお待ちです」「おひ、済まんな茶  
々丸」「ロボットつ!?」「あれ、どう見てもロボットだよな?  
「おい、一護!置いていくぞ!」「ちょっと!待てって!…」  
そして、親父達の後についてログハウスの中に入ると…「一心、隨  
分と久しぶりだな?」「ああ、そうだなエヴァ」  
親父と会話をしている金髪の女の子がいた。

## 五話（後書き）

感想お待ちしています！！

## 六話（前書き）

アンケートの結果ですが…

一護を女子のクラスに入れることができ決まりました！！

アンケートに協力してしてくださった皆さん、本当にありがとうございました！！

後、獅子丸様、小元数乃様感想ありがとうございました！！

ちゃんと、ご指摘通りになつていると良いんですね…

それと、今回はかなり短いです…

「ほう？ そいつがお前の子供か？」一心  
「まあ、そういう事だ」  
「というか…誰？ この子？ まさか、あれか！？ 懲し子とかそういう…！？」  
「違うわ、このボケがああ！！！」  
「だから、心を読むなつた：ぐああつー？」  
俺に本日一度目の顔面へのWパンチがクリーンヒットし、吹っ飛ばされる。  
「あの子、意外に力があるじゃねえか！！」  
「あれか？ お前の子供は受け継いではいけない所だけ受け継いだのか？」  
「違えよー！ ってかそれって遠まわしに俺の事を馬鹿って言つてるよな！？」  
「別に私は間違つたことは言つておらんが？」  
畜生…完全に舐められてる…  
「つていうか、親父…！…この子誰だよー！」  
すっかり馬鹿騒ぎで忘れてたぜ…  
「ん？ こいつはエヴァンジエリンA・K・マクダウエル、現在60歳の吸血鬼だ」  
へえ～600歳ねえ…ずいぶんど、長寿なことで…  
「…は？ 600歳つて…ババ…」  
死にさらせえつ…！…！  
「ゴッハアツー！」  
いや…マジで痛いからつー！…パンチを顔面に叩きこまれると…！…  
「全く…躾がなつていなーいな！」  
「パンチ顔面に叩き込むババアに言われたくねえなー！」  
あ…しまつた…またババアって言つちましたー！

「ほ～う～。そうかそうか…そんなに自分の血の雨が見たいのか…？」

いやいやいやつ！？何その剣つ！？そんなの振り下ろしたらつ…！？

「マスター、別荘内でお客様がお待ちですから…」

「むつ…そういうえばそうだつたな」

茶々丸の言葉でエヴァンジルの剣が俺の目の前でギリギリ止まつた。

助かった……のか？

だが、それはエヴァンジルがじつに向けた笑みで間違いだと  
いう事に気がついた。

「続きは向こうで殺るうか？」

その言葉を聞いた俺は回れ右をしてその場から逃亡を図つたが、当

然上手くいくはずもなく…

「やめろつー！放せつー！」

「うつせえーーーとつとと逝くぞーーー！」

「字が違えええつつつーーー！」

六話（後書き）

感想お待ちしています！！

## 七話（前書き）

獅子丸様、雪門様、感想ありがとうございました！！

恋次に無理やり引きずられ、ついたのはエヴァ（エヴァンジエリン）つて言うのが面倒だから俺が勝手に省略した。）の家の地下だ。

「こんな所で修行すんのかよ？」

「ケケツ、チゲエナ…ヤルノハゴ主人ノ別荘ノ中ダゼ」

「…ん？ 今の中誰の声だ？」

慌てて周りを見回した俺の目が壁の近くにある一つの人形を捉える。まさか… 「これか？…いやいや人形が喋るわけないか…」

「トロロガ喋レルンダナ、コレガ」

と、俺の前にある人形の口が動き喋り始める。

「魔法つて本当に何でもありだな、おい…」

「ん？ 何だチャチャゼロか？ いたのかお前？」

「ケケツ、ナニ言ツテヤガル？ モトモトハゴ主人ノセイダロウガ」

「はっ！ そう言えばそうだったな？ 封印のせいでお前は動けないんだつたか！」

なんだこいつ、なんか呪いでも掛けられてんのか？

試しにエヴァに聞いて見ると、予想していなかつた答えが返つてきた。

「私に掛けられている呪いはな… 登校地獄の呪いだ」

「はあ！ ? 何そのショボい呪い！ ?

「そのせいでは私は13年間中学生をやつしているんだ… 全く恵々しい…！」

「えへつと… ジンマイ（笑）」

「今、お前他人事だと思つただろつ…？」

「イエイエ、ベツニ…」

チヤチヤゼロのようにに片言になりながらも必死に視線をエヴァと合わせないようにする。

「ふん、まあいい… とりあえず行くとしようか？」

と、エヴァが奥から引っ張り出してきたのは…

「あ～… やつぱ見た目はガキだからそういう玩具で遊びたゞ 「なんわボケつ！！」「ぐはああつつ…？」

いや…マジで痛いって…！…仮にも女の子なんだから蹴りは止めろつて…！」

「まあ、馬鹿には見せた方が早いか？おい… 一護ちよつといつちに来い」

なんだ？なんかあるのか？

そう思いながら、エヴァが出してきた玩具のような物の前に立った瞬間に目の前の風景が変わった。

「うわ！？な、何だここ…」

そこに広がっていたのはリゾートのような光景だった。

「ここにはドラマ魔法球と言つてな、ここでの一時間は外の一日になるという優れ物だ」

いつの間にか俺の横に来ていたエヴァが説明した。

「へ～… 随分と便利だな」

「でも、ここに女の子が入ると老けやすくなるんだつて～！」

「そいつは「愁傷様… つて～？」

後ろを振り向くとそこには俺も良く知っている奴がそこにいた。

「ゆ、祐奈つ…？」

「ヤツホ～一護！！」

な、何でこいつがここに…！？

「私が連れて來たんだ」

「はあ！？何勝手に…」

「違うの一護… 私が頼んだの…」

祐奈が頼んだ？ いったいどういう事だ？

「簡単に言つとな？お前は一心から魔法は隠す物だとこいつとは聞いただろ？」

その問いに俺は頷いた。

「明石はな、魔法の存在を知つてしまつただろう？だからこの町の

正義の魔法使い共が、こいつの記憶をいじるかそれとも… どうと  
ころで私が面白そだつたからこいつを預かつたという訳だ… まあ、  
本人も強くなりたかったらしいしちょうど良いだろ?「.  
… こいつが決めた事だ… 僕が口を出す義理は無い。

だが、どうなるが俺がこいつを守るって事には変わり無え… その  
ために俺は強くなるつて決めたんだ!!

「わかった、じゃあエヴァ… そいつを頼んだ」

「こいつが鍛えるんだ、強くなるに決まっているわーー」

わて、祐奈はエヴァに任せるとして…

「さあ、親父… とつとと始めよつぜーーー」

「ふつ… そうだな… それではまず畏を留得してもらおうか?」「.  
畏… ? なんだそれ?

「まあ、わかるよつに説明してやる… まずはだ… 妖怪がする事は何  
だか分かるか?」

「… 人をビビらせる事じやねえのか?」

「その通りだ… 個々の妖怪には人々を恐れさせる特徴がある… 例え  
ば俺たちぬらりひょんは…」

その言葉が終わると同時に親父が俺の目の前から消えた。

「はあー!? き、消えた! ?」

「消えてねえよ! 目の前にいるだろ? がー!」

その言葉と共に再び親父が目の前に現れる。

「これが… 畏…」

「すげえ… これを覚えれば… ! !

「よし、一護… 早速妖怪化してみる」

「ああーーー!」

「よし……

あれ? セツニティ… どうやったんだつたつけ?

「自分の中の妖怪の血をたぎらせる感じだ」

「おお、サンキューーーー!」

んじゃあ、もう一回…

自分の血をたぎらせる感じで…

「ゾオオオツツツ」

俺にあの時と同じ力が湧いて来る。

「やりやあ出来るじやねえか」

「ああ、悪いな…手間かけてよ…」

「はつ…急に偉そうになつたなー護?」

「無駄口は良い…とつとと始めるぞ親父」  
試しに親父がやつた技をやってみたが…

「できねえ…」

「どうやつてんだよー?全然分からねえ…」

「心を落ち着かせろ…そして、その状態で相手を威圧しき」  
…心を落ち着かせて…そして威圧するつ…!

俺が今出せる限りの殺氣を親父にぶつけん…

「ほ~う…やりやあできるじやねえか…いいか一護、俺たちぬり  
りょんはその畏を明鏡止水と呼んでる。」

「明鏡止水…か…だが、これだけだと…」

「分かっているさ、だからこそ俺たち妖怪は次の段階に進むんだ」  
次の…段階だと?

「それは相手の畏を断ち切る技だ、その名は鏡花水月…まあ、今回  
はそう簡単に行かないかもな?」

「それを覚えれば俺はもっと強くなれるんだろ?だったら覚えるさ  
死ぬ気でな!!」

そして、俺の修行が再び再開された…

十七話（後書き）

感想おまかしてますーー！

## 八話（前書き）

獅子丸様、感想ありがとうございました！！

後、最近多い質問で織姫などの女性キャラを出すんですか？？？となるんですが

すいません…出しません…

ですが、二人ぐらいbleachから男性キャラが出てきますので  
楽しみに待っていてください…!!

「ガキイン、ガキイン！…」

「うおおおおつ！…！」

「はあああつ！…！」

剣と剣のぶつかり合う音が辺りに響きわたる。

その音を発しているのは言うまでもなく俺と親父だ。

「畏を技として昇華しろ」

と、親父に言われたものの俺はその手掛けかりすら得る事は出来なかつた。

くそ…確かに簡単には行かなそうだ。

「おりつ！…考え事とは余裕だなー護つ！…」

「しまつ…」

「ド、「オオン！…」

考え事をしていた俺は親父に容赦無く蹴り飛ばされ壁に叩きつけられる。

「ふう…もう一つヒントをやるつ…ぬらりひょんはどんな妖怪か、それが分かれば鏡花水月を習得出来る手掛けかりになるはずだ。」  
ぬらりひょんがどんな妖怪か…？

考えた事もなかつたな…

「まあ、外にでも行つて気分を切り替えてくると良いぞ…あ、後、外に行く時でも妖怪化を解くんじゃねえぞ」

「ああ、分かつた。」

そして、俺は親父に言われた通りに外に出て気分を切り替えることにした。

外に来たのは良いが…

「やる事無い…」

行くあても無く俺は町をぶらついていた、俺が修行している間に雨が降つたらしく辺りは水たまりがある。

その中の一つに俺の目が惹きつけられた。

「あれは…」

それは、水たまりに映つてゐる月だ。

それを見た俺の頭にある光景が蘇つてきた。

「確か…」

(六年前)

「わ～お母さん！～見て見て～池に月が映つてるよ～」

「あら、本当ね～一護」「護」

嬉しそうに池に駆け寄つて行く俺をお袋は笑いながら見ている。

「あれ？ 消えちゃつた…」

俺が池に手を入れると、それまで映つていた月が消えてしまった。

「ふふっ、一護…手を抜いてしばらく待つてみなさい」

お袋に言われた通りにしてみると、池に再び池に月が映つた。

「わ～凄い！～この月つて見えるけどここには無いみたいだねお母さん…！」

「そうね、鏡みたいね…まだ一護にはわからないかも知れないけどこれを鏡花水月つて言うのよ」

「きょーかすいげつ？」

「そういえば…こんな事あつたな…」

鏡花水月つてどつかで聞いた事あると思つたら…あの時か  
「そこにあるよ？ でそこにはない…か」

もしかしてこれが鏡花水月の手掛かりなのか？

そんな事を考えながら歩いていた俺の耳に何か言い争つよ？ うな声が

聞こえてきた。

その声が聞こえてくる方を見ると、三人の女の子に何やら絡んでいる不良共がいた。

「あ……ああいうのまだいやがったのかよ？」

呆れながら見ていると、女の子の一人が不良を突き飛ばし逃げて行く。

「あ～あ……あれはちょっとヤバいかもな……」

逆上した不良共が女の子達を追いかけて行く。  
しゃ～ねえな……助けねえと色々ヤバそうだ……」

急いで追いかけて行くと不良に追い詰められ、絶体絶命の女の子がいる。

どうやら、女の子の中のボーカルの子が足をくじいたらしく動けないでいる。

しかも、不味い事にさつき不良を突き飛ばした子だった。

「生意気なんだよっ……」このガキが……！」

不良の中の一人がその子を殴ろうとするが…  
それを俺が腕を掴んで止める。

「あん！？ 何d 「はい、おやすみなさい～」 ゲポアアツ！？」

そいつを殴り飛ばすと、間抜けな声を上げて吹っ飛んでいく。

「あ、あっちゃん！？」

「テメエっ！ よくもあっちゃんをつ……」

あっちゃんつて……ネーミングセンス無えな、おい……ん？あの子達も俺と同じ事を考えてそうな顔してんな……

「おい、テメエ……俺達ワイルドスターZに手を出してただで済む」と思つんじゃねえぞ……」

「「うわ……ネーミングセンスが……」

俺と殴られそうだった女の子の声がハモつた。

「つるせえ……ほつとけ……」

自覚があるみてえだな……まあなかつたら……

「愁傷様つて事で……」

「やつちまえつ……」

「「「おつり……」」

わて……掃除の時間だな……

(五分後)

「は～終わつた終わつた～」

不良共を五分足らずで愉快なオブジヒ（死体）にした俺は女子子達の方を向いた。

「大丈夫だつたか？あんたら？」

「「「…………」「」」

ん？反応が無い…ただの屍のようだ…ってそんな訳無えか…

「お～い！…もしも～し…！」

「は、はいっ！？」

「やつと反応したか…怪我無えか？」

「あ、はい…」

と言ひながら立とゞとする女子の子の顔が歪んだ。

「痛つ…」

「なんだよ、怪我してんなら無理すんなよ…ほひ、背負つてやるからこつち来な？」

「えつ！？そんな事…助けてもらつただけでも悪いのに…」

「田～遠慮しないで良いよ～その人に送つてもらひなよ～」

「そつそつ…！私と美砂は先生とかに連絡しないといけないし…」

よし、話もまとまつたみたいだし…行くとしますかね…

「そ、そんな…」

ん～…面倒だから…無理やり背負つか?

「よこしょつと」

「キヤつ…／＼／＼

背負われるのは嫌だつから…抱きかかえる」とこした。

まあ、どつちも嫌だらうがしょづがないか…

「そんじゅあ、寮に送るつて事で良いよな？」

「は、はいつ」

そして、残つた二人に気を付けるように言つてから女の子を抱えて去つていった。

その後

「「あつ！名前聞くの忘れたあつ！」と残された一人が叫んだ事を俺は知る筈もなかつた。

(円 side)

「あ、あの…恥ずかしいんですけど…」

「嫌だらうけど我慢してくれ」

…嫌というか、むしろ…

はつ！何考えてる私！？

た、たしかに、助けてもらつた時はかつこいいと思つたけどつつ／＼

顔がどんどん赤くなつていくのが自分でも分かる。

「ん？顔赤いけど、大丈夫か？」

そう言つた男の人気が心配そうに顔を近づけてくる…

ち、近いっ！…／＼／＼

でも、近くで見ると余計かつこいいな…

彼女とかいるんだろうな」と言つかいないと可笑しいでしょ。

聞いてみようかな…？

「あ、あのつ！」

「ん？どうかしたか？」

「な、名前教えてもらつても良いですかつ！？」

恥ずかしくて別の事聞いちやつた…流石に初対面の人に聞く内容じゃないし…

「黒崎一護だ、そつちは？」

「釘宮円です、あの、さつきは助けてくれてありがとうございまし

た黒崎さん！」

「さんはいいぜ、 同い年っぽいし……一護って呼んでくれ

え……？ こんなに大人っぽいのに私と同い年なの！？ 意外だな

「それじゃあ……一護君で良いかな？」

「あ、 良いぜ、 よろしくな円」

「うん、 よろしくね一護君」

(一護 side)

「帰つたぜ、 親父」

「おう、 遅かつたな一護」

別荘に帰ってきた俺を待っていたのは親父と恋次だった。

「どうだ、 一護……なにか掴めたか？」

「さあ、 どうだろうな？ まあ、 少なくともぬらりひょんがどんな妖怪かは分かつたけどな」

「ほう……それじゃあできる筈だよなっ……！」

と、 親父が切りかかってくる。

だが、 俺はそれを避けない……いや、 避ける必要が無い。

なぜならそこに……俺はいないからだ。

そして、 親父が俺の幻覚を切り裂いた直後に後ろをとる。

「鏡花水月……」

この技は相手の認識をずらすことで相手を攪乱する技だ、 そう、 あの時の月のようにそこにはいるようではない……それがこの技の本質だ。 「はつはつはつ……いや驚いた……まさかこんな短期間で明鏡止水と鏡花水月を得するとはな……さすが俺の息子と言ったところか……」

「これで、 修行は終わりか？」

「いや……これからが本番だ」

その声と共に親父の持っている刀が俺の腹を貫いた

八話（後書き）

上手くかけたかどうか…（汗）

感想お待ちしています！！

## 九話（前書き）

雪門様、一ツ「コリ様、感想ありがとうございます」とおっしゃいました！

p v 3 0 0 0 0 突破致しましたっ！！！

皆様ありがとうございます！！

「お、親父？」

俺は自分の目が信じられなかつた。

だが、現実は変わらない…

そう、現実は俺の腹を親父の刀が貫いている…ただ、それだけだ。

「テメエ…っ！？何しやがるつ！！」

そう言つた後に俺は氣付いた…

「痛く…ねえ？」

そう、全くと言つて良い程に痛みが無い。  
むしろ、俺の中に何かの力が流れ込んでくる。

畏とは違う何かが…

「ドオオオオツツツツ…！！！」

俺を中心にもの凄い爆発が起きた。

(恋次 side)

……上手くいつたのか？

最初に一心さんから聞いた時はとんでもねえと思ったが…鬼が出る  
か蛇が出るかだな。

ん？土煙が晴れてきたな…さあ、どう…

……俺は目の前の光景が信じられなかつた

一心さんの計画は確かに成功した…

だが、明らかに異常すぎる…

「ふう、なんか変な感じだな…」

「変なのはお前だ一護つ！！何だそのバカデカい刀は！？」

一護が持つている斬魄刀は明らかに大きすぎる…

「ん？何だこれやっぱデカいのか？」

「当たり前だつ…！」

俺のやつの一倍はあるぞ！？

こりや… 鬼も蛇も両方出てきちまつたんじゃねえのか？

(一護 side)

ん… 恋次の奴が何か失礼な事を考へている気がしたが… 気のせい  
か？

だが、そんな事は置いといてだ…

「俺に何したんだ、親父？」

「なに、新しい力を与えてやつただけだ」

「いやいやっ！？ 偉そうに言つてつけど下手したら俺死んでたから  
な！？」

「いや、大丈夫だ、死ぬ事は無えって分かつてたからな」  
…は？ 何言つてんだこいつ？ それにこのバカでかい刀の事も聞い  
てねえし…

「まずはだ… 恋次… こいつに見せてやれ」

「わかりました」

と、恋次が刀を抜き…

「吠えろっ！ 蛇尾丸っ！！」

と、叫んだ瞬間に恋次の刀の形が変わった。

「お～っ！！ 激えな～」

何か手品みてえだな…

「これが、始解つて奴だ」

「始解？？」

「ああ、俺が持つてる斬魄刀やお前が持つてる斬魄刀にはそれぞれ  
名前があるんだ、俺の場合は蛇尾丸つて名前だ、その名前を呼ぶこ  
とでその斬魄刀の力を引き出す… それが始解だ」

それじゃあこの斬魄刀にも名前があるって事か…

「よし、んじや早速修♂「ちょっと待て」 んだよ？」

何で止めんだ？ 親父の奴…

「修行はお預けだ」

「はあ！？何でだよ！？」

「テメエは学校だろうが……」

「やつべ忘れてたつ……」

「ふん、私としては学校に行かずに鍛えてやっても良いんだがな」「いやいやっ！？それ以上やつたら祐奈が死ぬからな！？」

「死ぬ直前までやるのが修行だろ？？」

鬼だ……

俺も修行の合間にエヴァと祐奈の修行を見たが……

鬼畜以外の何者でもなかつたな。

まあ、修行内容は簡単だ……エヴァの撃つ魔法をひたすら避けるつてもんだ。

最初聞いた時は随分簡単だ……と思つたが……

見た瞬間、目が点になつたな……うん……

だって、絶えず百発以上の攻撃が襲つて来るんだぜ？死ぬつての普通……

エヴァが言つには「体力作りの一環」らしいが……

でも、間違い無く体力は上がつてるな……

つてか、上がつてなかつたら可笑しいだろ。

「も、もう一步も動けない……」

「ご愁傷様としか言いようがねえ……」

そして、バテた祐奈を女子寮まで送り（明鏡止水は勿論使つた）俺達は自分達の寮に戻つた。

そして、次の日……

まだ、あれから一日しか経つてねえんだよな……未だに信じられねえ……

と、俺が教室で一人考え込んでいると「ピンポンパンポン～」1・Aの黒崎一護君、阿散井恋次君、学園長室に至急来てください「

「はあ？ 何かしたつけ？ 僕？」

「行ってみねえと分かんねえだろ？」

「まあ、 そりだけどよ…」

そして、 僕と恋次は学園長室に向かう事になった。

「なあ、 恋次…」

「あん？」

「明鏡止水使つちゃ 駄目か？」

「気持ちは分かるが… 使うな」

何故俺がそんな事を聞いたか… それは学園長室が女子のエリアのど真ん中にあるからだ。

何かクラスの奴らが羨ましそうな顔してたが… こういう事がこれじゃあ、 いつ不審者扱いされるか分からねえぞ… ?

と、 僕が考えていた矢先…

「ちょっとアンタ… ! ここは女子校よ… ! 何で男がいんのよつ… ! ?

後ろから誰かに怒鳴られる。

後ろを向くと、 両目がオッドアイで鈴の髪飾りを付けた女の子が俺達を睨み付けている。

「学園長に呼ばれたから、 仕方ねえだろ？」

「そんな事言つて、 変な事するつもりでしょ… !

「恋次… ! 助けてくれ… !

これ以上言つても聞かなそうだから恋次に助けを求めるが…

「知らん、 勝手にやれ」

「薄情者… !

「そつ… ! どうすれば… ! ?

助けを求めて辺りを見回すと、 見覚えのある顔を見つけた。

丁度いいことに、 あっちも俺達を探していたようだ。

「タカミチ… ! 助けてくれ」

「何してるんだい？ 一護君に阿散井君… ? それに神楽坂君も」

この、 シブい人は高畑・T・タカミチ、 僕の親父の飲み仲間だ。

ガキの頃によく遊んでもらつていて、仲が良い大人の一人だ。

助かつた～っ！！

俺は早速事情を説明し、タカミチの「彼らは本当に学園長に呼ばれているんだよ」発言で

神楽坂とかいうやつもタカミチの言葉で納得したようで…

「勘違いしてごめんなさいっ！…」と、素直に謝つてくれたので

「いいぜ、別に気にしてねえからよ」と、許す事にした。

そして、神楽坂と別れ、タカミチの案内で学園長室に向かった。その途中で、「何で学園長室つて女子のエリアのなかにあるんだ？」

と聞くと、

「あはははは…」と笑つてはぐらかされた。

……趣味でここにしたとかねえよな？……急に心配になつてきただぞ、おこーー！

「さあ、着いたよ」

考へている間に学園長室の前に着いたらしい。

「コンコン」

「高畠です、二人を連れてきました」

「うむ、入つてよいぞ」

という声を聞いた後にタカミチの後に続いて俺達は学園長室に入る。「黒崎一護君、阿散井恋次君、」と苦労じやつた、そして黒崎君に至つては昨夜は巻き込んでしまんかつたのう」

そこにいるのは言つまでもなく学園長だ。

……やっぱ、ぬらりひょんにしか見えねえ……

そんな事を考へていると、俺の頭にある考へが浮かんできた。

「あれ？もしかして俺も老けたらこうなるのか！？」

やべ…テンション下がってきた。

「フオッ！？」いま途轍もなく失礼なことを考へられた気がする「

氣のせいです」そ、そうかの？」

「それより、学園長本題を…」

「う、うむ…それでは早速じゃが…君たち一人にはこの度女子クラ

ス1 - Aに入つても「うれしい」

..... ん? 今この糞じじい何か変なこと言つたよな?

女子クラスに入れだと?

「恋次...」

「ああ」

俺達二人は無言で斬魄刀を指輪（親父に、斬魄刀を収納する為に貰つた）から取り出す。

「フオツ! ?ち、ちょっと落ち着くんじやつ! !」

「遺言なら後で聞きますが?」

「殺す前提なのかのう! ?」

「勿論」

「まあまあ、落ち着いてくれ二人共」

まあ、タカミチが言うなら... といふことで斬魄刀を指輪の中に戻す。  
「ふむ...」この度は男子と女子を共学にするかもしれんという計画が  
持ち上がつての? 試験生として一クラスから一人の男子生徒を女子  
クラスに入れることとなつたんじやよ

「で、俺達をつて訳ですか?」

「うむ、そういう事かのう」

「まあ、そういうことなら...」

と、恋次の方を見ると頷いてくる

「うむ、そういう事なら今日からで良いかの?」

「わかりました」

「ああ、後今日の午前0時に世界樹広場に来てくれんかの?」

「だが、断るつ! !」

「フオツ! ?」

「冗談です」

その後、学園長室を出てタカミチにクラスに案内してもらひつ  
その途中でクラス名簿を見せてもらひつと...

「いや、可笑しいよな? このクラス! ?」

祐奈からはじまりエヴァや茶々丸や昨日戦つた女剣士や円...

「これは仕組まれているとしか言いようがないな…

まあ、良いか…

「さあ、一護君、恋次君入ると良…まあ一応言つておくれど…氣を付けてね」

ん?なぜ氣を付けなきやいけないんだ?

まあ入つてみれば分かるか…

そして、扉を開けると…上から黒板消しが落ちてくる  
へつ、この程度…あの修行に比べれば…

楽勝だこの野郎っ…!

落ちてきた黒板消しを避け、ついでにバケツもキャッチする。  
そして、足元に張られた紐を躲し飛んできたおもちゃの矢をバケツで受け止める。

「「「おお~っ…」」」

驚きの声がクラス内に響く…若干一一名、田を輝かせてはいるが…悪い予感しかしねえ…

「はい、みんな座つてくれ」

「「「は~い」」」

立つて騒いでいた奴らをタカミチが座らせる。

「みんな聞いているとおもうが、この度男子と共に学になるかもしきない」ということで男子の試験生を各女子クラスに一一名編入させることがになったんでね、うちのクラスは黒崎一護君、そして阿散井恋次君が入る事になった…さあ、一人とも自己紹介をしてくれ

「黒崎一護だ、よろしく」

「阿散井恋次だ、よろしく頼む」

「「「…」」」

あれ?なんか俺達変なこと言つたか?

恋次も俺と同じことを考えているらしく、困惑した顔をしている。  
だが、この心配はどうでもよかつたことがすぐに分かつた…  
なぜなら…

「「「かつこにこつ~!…」」」

クラスの大半の女子が悲鳴に近い叫び声を上げ、俺と恋次の鼓膜が  
破れそうになつたからだ。

「ねえねえ、何歳？」

「いや、普通に考えて同一年だろ」

「拙者と勝負でござる……」

「忍者……だと？」

俺と恋次の声が見事にハモつた。

「忍者ではないでござるよ？」

「その語尾直してから出直してこい」

と、周りが女子に囲まれカオスな状態になつてきた…  
そこに、「はい！…ここからは麻帆良のパパラッチこと朝倉和美  
が皆の代わりに質問するよ～」

と、一人の女の子がこの場を取り仕切り始める。

「つてか、パパラッチって自分で言つて良いのかよつ！？」

「そこら辺は気にしない方向で～」

朝倉に俺がツツコむがあえなくスル・される。

……つてかさつきから祐奈からビシバシ殺氣が籠つた視線が飛んで  
きてるんだが…

俺のせいじゃなくね？文句は学園長に言つてくれや…

まあ、別の意味で殺氣飛ばしてきてる奴もいるけどな？

その方向を向くと予想通り昨日の女剣士が俺と恋次を睨み付けてい  
る。

はあ、面倒だから放つておくか。

「それじゃあ、最初の質問～！！一人とも彼女はいるの？」

「いねえ」

「そ、即答…つて」

その後、朝倉からの質問が続きHRは終了した。

はあ～これから大変そうだな～

(午前0時)

(タカミチ side)

「学園長つーーいへり英雄の子だからと言つて遅れるのも限度があります……」

ガンドルフィー「先生の言つ通り……どうしたんだ一護君？」

まさか本当に来ないつもつじや……？

「はあ？ 別に遅れてねえぞっかりからいりこるだらうが」

「なつ！？」

あれは…明鏡止水か！？ いつの間に…

しかも、

「わ、わしの後ろを取るのはやめてくれんかの？」

ちやつかり学園長の背後を取つているし…

「さあ、一護君も来た事じやし…早速始めるとするかの？」

「なにすんだ？」

「力試しと言つひとで… そりぢやな… 刹那君と模擬戦でもしてもらおうかの？」

「なつ！？ が、学園長つそれは…！」

昨日の桜咲君と一護君の事があるとこつて… 何を考えているんだ

学園長は…！

「別に良いぜ？ 今日の朝からそこつて殺氣ぶつけられつ放しでイライラしてんだ」

一護君も桜咲君を挑発するようなことを…

「私も構いません」

「つむ、では両者前に出てくれるかの？」

そして、一護君と桜咲君が前に出て向かい合つ。 さあ、どうなることやら…

(刹那 side)

また、こいつと戦うことになるとは…  
だが、丁度いい…この間の決着をつけてやる…!  
あの赤髪の男も邪魔することはできないしな…  
真名が気を付けると言つていたが… 昨夜程度の実力なら警戒する必要すらないな。

「昨日は運が良かつたな? 妖怪」

「そりやどうも」

私は夕凪を鞘から抜き放ち目の前の妖怪を挑発するが、まったく奴は動搖すらしていない。

「まあ、弱いやつ程よく吠えるつて言つけど間違つてねえかもな?」「なん…だと!?

くつ…落ち着くんだ… 相手の挑発に乗つては冷静さを欠いてミスをしてしまつ…  
まずは…

「初めつ…!」

先手を取るつ…!

「斬岩剣つ…!」

私が放つた斬撃はそのまま奴に向かつて行く…?  
…?何故避けない!?喰らえればただでは済まないぞ!?  
そして、私の放つた斬撃が奴を切り裂いた…

「そ、そんナつ!?

まさか…そんナつ!?

「おい、何処見てんだ?」

「なつ!?

切り裂いた筈の奴がいつの間にか私の背後に立つている。

「いつの間に!?

咄嗟に背後を切り裂くが…

「手応えが…無い?」

「そら、こつちだ」

くそつ……ひよこまかとつ……

「はい、お終いな」

そしていつの間にか私の首筋に後ろから剣が添えられている。

「……降参だ」

(一護 Sōsuke)

やつぱこの程度か…

まあ、明鏡止水も見破れないのに鏡花水月を破れる訳ないか。

「そこまで……つむ一護君、桜咲君ご苦労じゃったな」

「はあ～つまんねえ事で時間使つちまつた」

早く帰つて始解を覚えなきゃいけねえのに…

「……だ……と?」

「あん?」

「つまらないだとつ……！」

「ああ、つまんなかったな、自分の力も見極められない奴との戦いなんかつまらないとしか言によづがねえ……まあ、もつと強くなつたら今言つたことは撤回してやるけどな」

悔しそうにしている桜咲を置いて俺は去つていった。

## 九話（後書き）

前話にbleachの男性キャラを出すということを書きましたが…  
予定としては

グリムジョーとウルキオラを出したいと思います。

出てくる時期は

グリムジョーはヘルマン編

ウルキオラは修学旅行編辺りで出したいと思います…！

後、感想お待ちします…！

## 十話（前書き）

獅子丸様、ノッポガキ様感想ありがとうございました！！

40000PV突破致しましたっ！！

皆さんありがとうございます！！

あれから一年…

俺は恋次との修行で始解を手に入れた。  
名前は斬月、能力は俺の魔力を喰つて強力な斬撃、月牙天衝を放つ  
というもんだ。

試しに威力を見てみよつと思つて別荘の海に月牙を撃つてみたんだ  
が…

威力が半端じやねえ… 海が割れるつて… どんだけだよつ！？  
その後エヴァにもちろん怒られて氷漬けにされたけどな…

そして、今は卍解つていう始解の更に上の段階の修行をしている。  
祐奈はといふと、もの凄い成長速度らしい（エヴァが言つには）  
強さで言つたら下手したら俺や恋次よりも強くて、魔法先生（タ力  
ミチと学園長を除く）よりも強いらしい。

そして、今は闇の魔法（マギア？エレベア）を習つている。  
ちなみに、祐奈の魔法の属性は風と雷らしい… それが分かつた時の  
エヴァの複雑そうな顔はなんだつたんだ？

…まあ、良いか…

「おい、一護、そろそろ切り上げるぞ…」

「ああ、わかった」

恋次に言われ、修行を切り上げた。

そして、その後エヴァの家で朝飯を食つて学校に行くのが普通にな  
つてきている。

まあ、寮があるつぢやあるんだが…

あそこはヤバい…他の男共に「裏切り者には死をつ…！」とか言  
われて殺されかかったからな…

文句は学園長に言つてくれつて、マジで…

「それにしても祐奈の魔法の上達ぶりは凄えな～」

「え～？ そうかなあ？」

「そう謙遜することはないわ、」この一年で上級古代魔法まで覚えるとはこの私も思つていなかつたからな

「えへへ～エヴァちゃんにまで褒められると何か照れるこやあ～」と、祐奈は俺とエヴァに褒められ、まんざらでもなさそうな顔をしている。

「あつ～～そ～～う～～ば～～エ～～ア～～ち～～ゃ～～ん、雷の斧から繋げやすい魔法つて何？」

「そうだな…」

エヴァと祐奈が魔法の話で盛り上がり始める。

俺には関係無い話だけどな…

理由は簡単、俺には魔法の才能が全く無いからだ…

魔力はかなり有るらしいが、才能の方はからつきし駄目らしい…その証拠に火を灯す初級の魔法では、一時間経つても火すら出る気配が無かつた…

…俺にはこの力が有れば充分か…

祐奈が強くなつたとしても俺が守る…それだけは変わらねえ、いや、それだけで充分だ。

「何笑つてんだよ？ 気色悪いな！」

「んだと？ 嘘噏売つてんのか恋次？」

「本当のことだろうが」

「よし、歯あ食いしばれ…」

今にも殴り合ひそうな雰囲気で睨みあう俺達に「いい加減にしないか、この馬鹿共…まあ、どうしても氷漬けになりたいと言つなら止めはしないが？」

「「け、喧嘩なんかしてないから氷漬けだけは勘弁して下さ～～～！」

「分かれば良いんだ、分かればな？」

黒い笑みを浮かべるエヴァを見て、俺達二人はガタガタと震える。

俺達一人が氷漬けにされた回数は数え切れない……あれだけは……  
ヤバい……震えが止まらねえ……

そして、そんなやり取りをしていると、いつの間にか学校についた  
のでさつさとクラスに俺達は向かつた……

(円 side)

今日は珍しく高畠先生が出張じゃなくて、久しづつにHRをしてる  
んだけど……

後ろを向いてあの人の方を向くと…  
やつぱり…寝てる…

一護はいつもHRは寝てるんだよね…

あ…明日菜が一護の所に歩いていつて…  
そして、「起きなさいっ！」

うわ～～…痛そ～…頭に思いつきり拳骨落とされてるよ…  
「つっ…なにしゃがるつこの野郎つ…」

殴られた一護が明日菜に向かって怒鳴る。

つて言うか明日菜は女の子だから、野郎じゃないでしょ…

「あんたが高畠先生の話を聞いてないからでしょ…！」

「眠いんだから仕方ねえだろうが…！」

「そんなん知らないわよ…！」

「あ～成程な…タカミチが話してるのを聞いてないとそんなに怒  
るのか」流石オジコンは違うな？

「あんたちょっと…！…それ以上言つたら…」

一護に言われて顔を赤くしながら慌てる明日菜を見ながら

…それじゃあ、一護が言つた事を認めてると同じだよ明日菜…と  
心の中で溜息をつく。

でも、好きな人がいるだけマシかな？…私は…  
ふつと、私の頭の中にあの時助けてくれた人の顔が浮かび上がる。  
その人も確か…黒崎一護つて名前だったような…

でも、あそこにいる一護とはまったく違うんだよね。髪の色も違つし…円の色も違う…

もしかして…兄弟とか？それとも従兄弟？うん…聞いてみたほうが早いかな？

そんな事を私が考えていたら

「はい、じゃあHRは終わりにするからね？一護君と神楽坂君は喧嘩をしないようにしてね？」

「は、はいっ！」

「く～い」

高畠先生が一人に注意してHRが終わっていた。

聞くなら…今しかないっ！！

「あ、あのさ…」

(一護 side)

面倒なHRが終わって俺はもう一度寝ようとする。

…畜生あのオジコンが…俺の睡眠を邪魔しあがつて…

だが、寝ようとした俺に

「あ、あのさ…」

と、誰から声を掛けられる。

声の方を向くと円がいた。

「ん？ どうした円？」

「え～っと…変なこと聞いて悪いんだけど…一護つてお兄ちゃんとか従兄弟とかいるの？」

「…………何でだ？」

多分、理由は分かる…

円はあの時の俺の事を兄貴か従兄弟だと思つてんだろ…

「何となくかな~」

と、俺の方を向いて円が笑う。

俺の事を教えたなら嫌でもこのちの世界に引きずり込まれる…

教える訳にはいかねえ……巻き込まれるのは俺達だけで十分だ……  
だから……嘘をつく……

「あ～いるいる、何か随分前にこっちに従兄弟が遊びにきてさ……人助けをしたとか言ってたぜ？しかも俺の名前使ったとか言ってさ～」

「へ～……そなんだ～ありがとう、一護」「うう～」「禮を言わることはそもそもしてねえ……それどころか嘘までついたんだ……

この事が心のどつかに引っかかるって今日一日は気分が悪かった……

(深夜)

侵入者が女子寮近くにいる。

その情報を聞いた俺は真っ先に女子寮に向かつた。

狙いは俺と同じクラスの近衛木乃香、近衛は関西呪術協会の長の一人娘でその体の中に膨大な魔力があるせいでの関西の過激派の奴らに狙われているらしい……

祐奈と恋次は別のところに戦っていて、手の空いた俺がそこに向かうことになつた……

「つたく……またお前らかよ……」「

「そう固いこと言つくなや、一護！また戦りあおうやないか～！」

「うつせえ、お断りだこの野郎！！」

そこには合計二十体程の鬼達、しかも大半が顔見知りだ。「顔見知りだからってここには通さないぜ？」

「んな事は解つてるわい

「そんじゃあ……始めるとするか～！」

指輪から斬月を出しながら妖怪化し、近くにいた鬼を切り裂き

「月牙天衝つ！！」

そして、そのまま月牙天衝を前にいる鬼達に放つ。

「ちよつ！？いきなり半分も減らすなんて反則…」

「勝負に反則も糞もあるかっ！！」

攻撃を鏡花水月で躱しながら次々に鬼を切り裂きながら怒鳴る俺の耳に

「一護…？」

ここにおいてはいけない奴の声が届く…

「なつ…な、なんでお前が…？」

そこにはいるのは円だつた…

## 十話（後書き）

祐奈の始動キ - が思いつかない（泣）  
誰か良い始動キ - を考えていただけると嬉しいです。

感想お待ちしています！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0699w/>

---

魔法先生ネギま！畏を継ぎし死神

2011年9月27日16時59分発行